

(年月) (水道事業)

四 水道開設

昭和
三五・四 和泊町簡易水道事業について認可申請

(一) 和泊町水道事業のあゆみ

昭和五十五年十月十六日「和泊町水道創設二十周年記念式典」において、和泊町水道課長田崎七三男氏は「和泊町水道事業のあゆみ」と題して、次のように述べている。

六 右 認可

(和泊校区 計画給水人口四六〇〇人

一日最大給水量 五九七³m³ 水源を畦布の湾門ワシヨに求める)

七 工事着工(工事費三六〇〇〇千円)

三六・一二 共同水栓による給水開始

三七・一二 工事完成

三八・五 皆川地区簡易水道工事に着手

二〇 右 完成、給水開始

七 大かんばつのため 畦布水源涸渇

地下水の調査に着手

二〇 第一次拡張工事認可(給水区域に瀬名・根折・永嶺・玉城・古里・国頭の各字を含め

計画給水人口九〇〇〇人

一日最大給水量一四六二³m³水源を内気名および後蘭の二ヶ所に求める。)

三九・五 内気名水源・越山浄水場及び瀬名・根折両字の配水管工事に着手

四〇・二 瀬名および根折字に給水開始

五 和送水管工事・玉城配水管工事に着手

一二 玉城字に給水開始

四一・五 後蘭水源および国頭・西原配水管工事に着手

手
四二・二 国頭および西原字に給水開始

四二・四 水道課設置(建設課より独立)

四二・六 古里・永嶺両字配水管工事に着手

一一 右 給水開始(第一次拡張工事了)

四三・四 地方公共企業法の適用を受ける。

四三・五 第二次拡張工事認可(大城・内城の両字を給水区域に含め、計画給水人口九七〇〇人

一日最大給水量一五六七³m³)

六 右 工事に着手

一一 完成により給水開始

四四・二 第三次拡張工事認可(後蘭・谷山・仁志を給水区域に含め、給水人口二〇四〇〇人

一日最大給水量一九五四³m³ 永嶺第一ボーリング井戸の設置)

四四・六 水源工事および後蘭・仁志字の配水管工事に着手

一〇 後蘭および仁志字給水開始

四五・五 谷山水源および谷山字配水管工事に着手

九 谷山字に給水開始(これにより全町内に配水施設が完成した。)

四五・一一 第三次拡張工事完成

(水源施設の自動化第一号)

四六・一 第四次拡張工事認可(一日最大給水量を二五七〇³m³に増加)

表5 和泊町水道事業規模の推移

項目	年度	昭和41年度	42年度	43年度	44年度	45年度	46年度	47年度
給水件数	件	1,200	1,565	2,050	2,199	2,283	2,359	2,474
普及率	%	48.8	62.5	82.6	89.4	94.0	97.0	98.1
給水能力	m ³ /日	1,462	1,462	1,567	1,954	1,954	1,954	2,570
給水量	m ³ /年	205,130	229,850	257,310	261,881	311,732	410,061	453,080
有収水量	m ³ /年	93,063	152,663	196,913	212,375	236,699	289,549	322,150
1日最大給水量	m ³	1,178	1,280	1,400	1,540	1,682	2,234	2,084
1日平均給水量	m ³	562	630	705	717	854	1,123	1,241
給水収益	千円	7,445	12,213	15,753	16,990	19,064	23,164	25,773
職員数	人	8	9	8	8	8	7	6
1戸1日当り使用水量	ℓ	212	267	263	265	284	336	357
1戸1月当り水道料金	円	517	650	640	644	696	818	868

(二) 事業規模の推移

- 四六・七 第四次拡張工事着手(永嶺第二ボーリング井 越山と和配水池間送水管・和泊配水管・埋立地配水管・国頭配水管・永嶺水源と越山間導水管等の工事)
- 四八・三 第四次拡張工事完成・内気名水源廃止
- 四八・二〇 後蘭水源ボーリング工事(φ二〇〇 深度八五m)
- 四九・四 畦布水源自動化工事
- 五〇・五 畦布水源予備発電機工事
- 五一・三 第五次拡張工事認可(計画給水人口九〇〇〇人 一日最大給水量三六〇〇m³ 後蘭水源の拡張)
- 五一・二 第五次拡張工事完成
- 四 和増庄ポンプ所および国頭増庄ポンプ所拡張工事(八月完成)
- 五二・一 右 工事完成
- 五二・二 右 工事完成
- 五三・一 上手々知名配水管改良工事に着手
- 五三・二 右 工事完成
- 五三・七 永嶺水源高圧受電設備工事、仁志・内城増庄ポンプ所工事に着手(一〇月完成)
- 五三・七 右 工事完成
- 五四・一 右 工事完成
- 五五・一 永嶺第三ボーリング工事・国頭および西原配水管改良工事に着手(十月完成)
- 五五・四 越山電磁流量計工事、内城・永嶺・仁志配水管改良工事に着手
- 五五・一 右 工事完成
- 五七・六 後蘭第二水源設置
- 四六・七 第四次拡張工事着手(永嶺第二ボーリング井 越山と和配水池間送水管・和泊配水管・埋立地配水管・国頭配水管・永嶺水源と越山間導水管等の工事)
- 四八・三 第四次拡張工事完成・内気名水源廃止
- 四八・二〇 後蘭水源ボーリング工事(φ二〇〇 深度八五m)
- 四九・四 畦布水源自動化工事
- 五〇・五 畦布水源予備発電機工事
- 五一・三 第五次拡張工事認可(計画給水人口九〇〇〇人 一日最大給水量三六〇〇m³ 後蘭水源の拡張)
- 五一・二 第五次拡張工事完成
- 四 和増庄ポンプ所および国頭増庄ポンプ所拡張工事(八月完成)
- 五二・一 右 工事完成
- 五二・二 右 工事完成
- 五三・一 上手々知名配水管改良工事に着手
- 五三・二 右 工事完成
- 五三・七 永嶺水源高圧受電設備工事、仁志・内城増庄ポンプ所工事に着手(一〇月完成)
- 五三・七 右 工事完成
- 五四・一 右 工事完成
- 五五・一 永嶺第三ボーリング工事・国頭および西原配水管改良工事に着手(十月完成)
- 五五・四 越山電磁流量計工事、内城・永嶺・仁志配水管改良工事に着手
- 五五・一 右 工事完成
- 五七・六 後蘭第二水源設置

昭和48年度	49年度	50年度	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度
2,547	2,604	2,673	2,745	2,804	2,966	3,023	3,075	3,071	3,135
99.1	99.3	99.5	99.7	99.8	99.9	99.9	99.9	99.9	99.9
2,570	2,570	2,570	3,600	3,600	3,600	3,600	3,600	3,600	3,600
500,570	518,840	551,040	607,460	720,650	767,648	804,622	784,344	844,279	851,740
357,480	389,090	413,730	464,140	545,460	589,630	619,680	604,347	626,925	654,960
2,402	2,850	3,212	3,104	3,150	3,420	3,402	3,360	3,440	3,320
1,371	1,421	1,510	1,664	1,974	2,103	2,205	2,149	2,313	2,334
28,598	34,487	48,195	55,055	65,430	71,518	76,645	90,327	94,385	97,808
7	7	6	7	7	7	7	7	7	7
385	409	424	463	533	545	562	538	559	572
936	1,104	1,503	1,671	1,945	2,009	2,113	2,448	2,561	2,600

表6 水源の能力

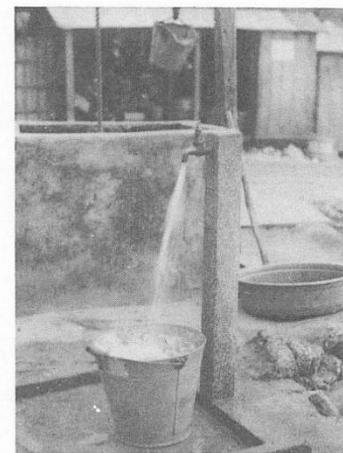
水源名	取水能力 (1日)	備考
ワンジョ 湾門水源	362 m ³	35年度建設
後蘭水源	1,150 m ³	41年度建設 54年度改良
永嶺水源	1,728 m ³	44年度建設 54年度改良
谷山水源	729 m ³	45年度建設
計	3,960 m ³	



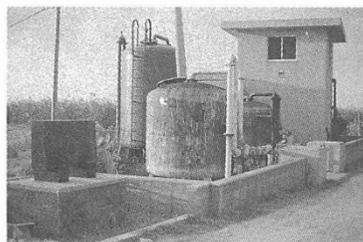
20 昭和35年水道工事(手掘り)



21 昭和35年水道工事



22 簡易水道(共同栓による給水)
(昭和36年12月)



23 永嶺水源除鉄設備



24 高千穂配水池

(四) 昭和五十五年十月十六日「水道創設二十周年記念式」にあたり、和泊町長武田恵喜光氏は、次のように式辞を述べた。

式辞

本日は和泊町水道創設二十周年記念式典にご案内申し上げましたところ、万障お繰り合わせ多数の皆様が御臨席くださいましたことを、厚く御礼申し上げます。

本町の水道事業は、この「水道事業のあゆみ」に詳しく記されているとおりであります。私か昭和三十三年二月町長就任早々から水道事業に意欲を持ったのは、二つの理由からでございます。

その一つは、小さいときから、母や姉が水汲みに大変な労力と時間をかけていたことを知っていたからであります。私の集落には井戸がなく、お天神様の湧水だけを頼りにしていました。干ばつが続いたりするときは、水汲み番が数人も並んでおり、チョロチョロわき出る水を、おけやバケツにすくうように汲み取るには、相当な時間をかけたものです。また雨の日も、風の日も、朝晩坂道を上り下りして、水をこぼさないように運んで来るのは大変なことでした。

その二つは、大城小学校の校長をしていたとき皆川に住んでいました。皆川は、井戸もなければ泉もなく、越山から大城集落を通って流れ下る石橋川の分流を集落内に引き入れ、それをろ過して飲料水にしています。田んぼの中を流れて来る水なので、安心して飲めず、沸かして飲んでいましたが、農作業などから帰って、のどがからから渴いているときなど、生水をガブガブやっているのを見受けたりして、これは万一のことがあったら、人道上の問題であると思つたこともありました。

そういうことからして、町内をくまなく歩き回っているうちに目をつけたのが、畦布のワンジョの水であり、内気名のフアンタの水でありました。澄みきったきれいな水がたくさん海に捨てられていることがもつたいなく、この水を何とかして各家庭に送れないかということを考えて、郡内はもちろん、県下あちらこちら回ってみました。水をあげて使っているという話を求めて、かけ回っているうち、松本町を訪ねたとき、七十メートルほどのがけ下から水をあげて使っているという話を聞いたので、水源地まで下りてみました。

細い山道を三十分近く歩いて下りた所に、こんこんとわき出るきれいな水がありました。そうしてその揚水施設を見ました。それからさらに上って、集落の人たちの話を聞きました。

「今までは、毎朝顔を洗うのにも、ひしゃくでわずかばかりの水を汲み、猫が顔をなめるようにして洗っていたが、水道ができてからは、各家庭にふるまでできたので、みんなの顔や肌がきれいになりました。」と、喜んで話してくれました。

それに元気づけられ、さらにあちらこちら探し回っていました。最後に決め手となったのは、徳之島で南西糖業が、鹿浦川の水を伊仙工場まであげていることとありました。

その間満三年、そうしてようやく畦布の字の皆さんとの話し合いもついて、諸手続きを終えて、工事に着手したのが三十五年七月でした。

それ以来二十年、振り返って見ると、いろいろなことが走馬灯のように、私の頭の中を駆け回っています。

皆川に、竿津山のふもとからきれいなわき水を水道管で引いて各家庭に配り、大変喜ばれたことや、いち

付けられ、どんな災害のときでも、水だけは不自由しないようになりました。

このような思い出話をしていくと、夕方までかかっても話は尽きないと思うので、こちら辺りでやめたいと思います。湾門の水を水道事業によって各家庭に送るといふ計画を立てたとき、「水はただで飲めるのに、金で買ってまで飲むのか」という言葉が一般町民にあり、議会にまでその声が出たことが印象に残っています。現在では普及率九十九・九パーセント、ほとんど全戸に水道が行き渡るようになりました。

また料金に対する私の基本的な方針は、女の一日の労働賃金でありました。それは畦布の女の人たちが、半日掛かりで、朝晩あの坂道を、おけいっばいの水を頭に載せて運んでいた姿から思いついたもので、当時の基本料金は、五立方メートルにつき三百円でありました。その割りで計算すると、今では三千五百円にならなければならないが、今日現場でご覧になったように、いろいろな企業努力によって、二立方メートルまでの基本料金が三百九十円にとどまっていることも、ご承知願いたいと思います。

ばん喜ばれ感謝されると思っていた水道の事業が、三十八年の大干ばつにあつて湾門の水は枯渇、畦布の人々からはさんざん怒られ、町民からは「金を取って塩水を飲ますのか」と苦情たらたら、議会でも、建設課長の森実康君と私はとつちめられ通し、夜もろくろく眠れない状態でありました。

そういう苦しい思いが続いているとき、現在の田崎課長が昭和水道をやめて、郷里宮崎に帰る意志があるということを知り、森課長から聞いたので、森課長を連れていち早く名瀬に彼を訪ね、七重のひざを八重に折って和泊町役場入りを懇請、ようやくその実現をみて、ほっとしたのであります。それ以来、彼が専門の知識と技術をもって逐次水源を開発し、綿密な計画と経営の妙味を生かし、また課員の昼夜を分かたぬ努力によって、町民から信頼され喜ばれる今日の水道となったのであります。

特に沖永良部台風のときほど、町民が痛切に水の有り難さを感じたことはなかったと思うのであります。が、これも禍を転じて福となすの例え、国から調査に来られた一委員の発言によって非常用発電機が備えられ、しかも奄美大島の市町村の中で、一回の時間給水もなく、完全に給水しているのは和泊町だけです。最も水資源に恵まれない沖永良部島で、和泊町の水道事業が順調に進んでいるのはどういう訳かと、県や各市町村でも、むしろ驚異の目をもって見ているところがあります。

これは前にも申し上げたとおり、田崎課長の人並み優れた技術と経営努力、それに水道課職員一同の町民に対する奉仕の精神によるもので、町民の皆様方も、彼らの日ごろの努力を認めてもらいたいと思います。

以上のようなことで、今日二十周年という区切りの良い年に記念碑を建立して、その除幕式を行い、水道事業に協力してくださいました方々のご功績を永遠にたたえたいと思つて、この式典を挙行したしだいであります。

ご案内申し上げた方々も、議会その他の関係者のほかに、本日感謝状を贈呈した功労者をはじめ、水道開設のため大事な土地を提供してくださった多くの方々、昼夜家庭を顧みる暇のない主人を助けて、内助の功を果たしている水道課職員の家族の方々、また毎

日水を使っているご婦人方の代表として婦人会長さん方を、ご案内申しあげてあります。

昔の島の生活と、いまの生活の移り変わりを思い起こしながら、いま一度、水道施設の有り難さを見直してくださるようお願い申し上げます。

しかし水には限りがあります。毎年二千ミリから二千三百ミリの雨が降っていますが、それをどんなにして我々の生活に吸収していくかということが、わが和泊町のこれからの命題であります。現在のところ、本当に限られた水で、ようやく命をつないでいるということが実情でございますので、皆様方はじめ町民各位が、水の節約にもご協力を賜りますようお願い申し上げます。

昭和五十五年十月十六日

和泊町長 武田恵喜光

(五) 昭和五十五年十月十六日「水道創設二十周年記念式」にあたり、和泊町連合婦人会長森力子氏は、次のように「祝辞」を述べた。

祝 辞

人影絶えた湾門へ、幼い子供の手を引きながら行ったこともありました。

湾門の水は、そのころどんなに日照りが続いても、水量が減るといふことはありませんでした。夏は冷たく、冬は温かい神の恵みの水です。「この水を何とかして上にあげることができないものだろうか。もしそれができたら、女たちが少しは楽になるだろうに」と、大きなおけいっぱいの水を頭に載せ、ざるいっぱいの洗濯物を小わきに抱きかかえ、あの坂道をあえぎあえぎ上りながら、いつも話し合っことでした。

その夢のような話を、実行に移す話が持ち上がりました。昭和三十四年、当時の畦布字区長であった速水爲広さんや、町議会議員の三島安澄さん、その他有志の方々が中心になって、ダイナポンプで水をあげて簡易水道を造ろうという話が持ち上がりました。字常会にもかけて慎重審議しましたが、計画を具体的に進める段階で、結局、工事費・維持費など莫大な経費がかかることと、お流れになってしまいました。

そんなある日、当時の花田助役さんが、本土のお偉い方々を伴って湾門に下りて来られました。多分視察

水道創設二十周年記念式典を挙行するにあたり、まず町当局と、現場責任者として当時昭和水道の社員でありました現在の水道課長田崎七三男様に、深甚の謝意を表したいと思えます。

顧みますと、二十年前まで「畦布には嫁にやるな」とまで言われていたほど、水源に遠いため、畦布の人たちは過酷な生活を強いられ、成長して参りました。

物心つくころから、バケツを頭に載せ、石ころだらけの坂道を水汲みに湾門へ下りました。水がこぼれないように、必ず蘇鉄の葉を二つ折りにして、おけやバケツの中に入れました。夏の暑い間は、水がこぼれて身体がぬれても何ともありませんが、冬の北風の吹きすさぶとき、四五百メートルもある急な坂道の上り下りは、本当につらうございました。少なくとも一日三回、普通五く六回、そうして祝事や法事には、別に数人の水汲み夫を頼まねばなりません。私の家では、母があまり丈夫ではなかったので、水汲みは一切私の受け持ちでした。学校に勤めていたころも、必ず朝水を汲んでから出勤、帰ってからまた水汲みに、時には月明かりを頼りに、またやみ夜にカンテラを提げて、

においでになられたのだろうと思えます。私かごあいさつを申し上げますと、「何か要望はないか」とおっしゃいました。「このたくさんある水を上にあげてくださると、本当に助かるのですが」と、不可能なことだとは思いますが申し上げました。しかしそれから間もなく、湾門の水をあげることになりました。

新しい事業が計画されるときは、いつの世にも反対される方がいるものです。湾門の水をあげる話も、例外ではありませんでした。しかし毎日の水汲みに苦労している私たち婦人にとっては、全く願ったりかなったりのことなので、実現の暁を夢見て大賛成でした。町当局と字民との話し合いが何回となく持たれ、ようやく着工の運びになりました。

工事は順調に進み、やがて集会所の横に出来た共同給水栓の蛇口から、はじめて水が出たとき、私どもは思わず「水が出た」、「水が出た」と涙を流しながら叫び合い、跳び上かって喜びあいました。「手の舞い、足の踏むところを知らず」とは全くこのことで、私の一生中の最高の喜びでありました。もう、あの坂道を水汲みに下りることもないのです。その分だけ仕事に

精出し、身体を休めることもできるのです。

あれから二十年、畦布字の婦人たちも楽になりました。「畦布に嫁にやるな」という言葉も、いつしか死語となり、現在の若妻たちは余所よせから来られた人が多くなりまりました。畦布字の人たちは、もう水汲みの心配もなくなり、持ち前の根性で、朝早くから夕方遅くまで、夫婦そろって農業に精励しています。

私たち畦布字のことばかり申し上げてしまいました。が、全町に水道が普及してから十年、いちばんその恩恵に浴したのは私ども婦人であります。衛生思想の向上に伴い、生活環境も整備され、私どもの生活も都会なみになりました。過去において、大なり小なり水で苦労してきた婦人の私たちは、ときどき昔の水不足時代を思い起こして、子や孫にも言い聞かせ、一滴の水も無駄にはしてはいけないと思います。先ほど記念碑の除幕式に参列して参りましたが、当時のいろいろなことが次から次へと思いつき、感無量、涙のじむのを押さえることができませんでした。

水道の元祖は何と言っても畦布の湾門ワシジヨです。しかし湾門の水だけでは足りず、その後、後蘭・谷山・永嶺

たします。

昭和五十五年十月十六日

和泊町連合婦人会長 森 力子

五 水道開設後の和泊町

沖永良部島には、昔から「六月ルケガチピヤイ」という気象用語がある。それは、梅雨が明けてから旧暦六月のころ、一か月も二か月も雨が降らずに、毎日のようにかんかん照りの日照りが続くことをいう。そのころよく町主催の雨いが行われたものである。すなわち町内の全家庭から一人以上、金属音の出る鳴り物を持って、根折の西の高台（マドウルヌチヂ）に集まり、畑の真ん中で終日炎々と天を焦がすほど火をたきながら、その周囲を三千名ほどの町民が鐘をたたいて終日回るのである。しかしこのようにして雨いをして、恵みの雨はなかなか降らないことが多かった。

また冬になると、例年雨量が少なくなり、十一月・十二月のころ干ばつで困ることが多かった。このような干

と次々水源を開拓し、大干ばつときでも給水制限をすることなく今日に至っています。これひとえに、昭和水道の工事完了後、その工事責任者であった田崎様を、和泊町行政の一員として迎えた武田町長の英断と、田崎課長の仕事に対する情熱と責任感、それに加えるに水道課職員一同の昼夜を分かたぬ献身的な努力のたまものであり、私ども町民一同の感謝感激に堪えないところでございます。しかしながら、山々が次々開墾されていく昨今、人口の増加と文明の進歩に伴って、町民の使用水量も増大するでしょうが、水資源の確保は大丈夫でしょうか。心配でなりません。本土のように水量豊かな川やダムがあるわけではなく、地下水だけに頼っているのです。水資源には限りがあります。私たち町民一同、一滴の水も大切に使いしていきたいものだと思います。

最後になりましたが、田崎課長はじめ、水道創設にご尽力くださいました関係者の方々に、心から御礼を申し上げます、これからのご健康を祈念するとともに、和泊町水道事業発展のため、今後ともますますご尽力を賜りますよう、切にお願い申し上げます、私の祝辞とい

ばつ現象は、沖永良部島だけではなく、大島郡全体にわたって毎年同様な現象がおこる。夏・冬の干ばつの場合、他の市町村では給水制限をする場合が多いが、和泊町では、昭和四十二年水道課設置以来、史上最大といわれた沖永良部台風のときも、ほんのしばらく給水制限をしただけで、それ以外には給水制限をしたことがない。

「ブリタニカ国際大百科事典」にまで指摘されているように、奄美群島でもいちばん水の乏しいこの島も、県下有数のすばらしい水道ができたお陰で、町民の衛生・文化生活は格段の進歩をとげた。

○昭和五十八年十一月末現在における、各集落ごとの銭湯・家庭風呂・温水器等の設置状況は、次表のとおりである。

表7 銭湯・家庭風呂・温水器の設置状況

集落名	戸数	人口	銭湯	家庭風呂	温水器
和泊	六一一	一七〇七	一	三六五	九〇
和手	一一三	三五九		一〇八	三七
手々	三二七	八八六		二三四	六五
上手々	六一	二二四		六一	一四

